

## CONTENTS:

- P1 巻頭言「FDとは、延長線上からの脱却」  
「授業アンケート集計結果を目の前にして」
- P2 授業アンケート新システム「C-Learning」活用事例紹介  
2011年度後期授業アンケート結果報告
- P3 教育センター紹介
- P4 FDフォーラム開催  
授業改善の取り組み事例紹介

## 大阪工業大学FD委員会



## FDとは、延長線上からの脱却

—自己改革により生きがいの共感と共有を—

知的財産学部長  
知的財産研究科長

田浪 和生

私は企業に永くおり、その発展と成長を体験してきました。企業も大学も組織です。組織を発展させる鍵は、限りなき自己改革です。企業ではそのために「共生」という企業理念を掲げ、絶えざる改革を実践し、発展を目指します。共生は文化、習慣、言語、民族などの違いを問わず、すべての人類が未永く共に生き共に動いて、幸せに暮らしていける社会をめざし、世界の繁栄と人類の幸福のために貢献していくことです。グローバル企業は、それが存続理由です。

大学の存続と発展の鍵も、考え方は同じと思います。日本では少子高齢化を迎え社会環境が様変わりし、他方、経済活動はますますグローバル化する世界において、教育の在り方が問われています。正にグローバルに活躍できる人材(人材でなく)の育成が一段と必要となってきています。こうした環境変化に対応し、あるいは変化を予測して対応していくために、大学では教育理念を掲げ、教職員・学生が一丸となって共に自己変革し、改革して行かざるを得ません。

本学には、皆様ご承知の誇るべき建学の精神があります。「世のため、人のため、地域のために理論に裏付けられた実践的技術をもち、現場で活躍できる専門職業人の育成」です。私はその一員として、この精神にのっとり、教員として何をなすべきか、日々実践の時と痛感しています。その実践の鍵が、FD、即ち、教職員と学生の「共学」による限りなき自己改革だと思っております。共学による自己改革とは何か、企業と比較しつつ、大学におけるFDの目指すものを、自戒を込めて纏めてみました。

- 1.FDとは、誇りの共有—大学の特色を打ち出し、プライドを共有し合う  
特色ある大学の実践教育を打ち出し、建学の精神を全うしようではありません

か。社会から見れば、本学の工学・情報科学・知財は三位一体の集合体です。密接な関係を活かして特色を活かした教育にプライドを持って邁進しようではありませんか。

- 2.FDとは、顧客目線—教育サービスを受業者の目線で見ると  
教育サービスの原点は受益者です。企業なら顧客、大学では受講学生・保護者でしょう。迎合する必要はありませんが、将来ある学生の自主・自発・自覚を促す指導に心をこめて取り組みたいものです。

- 3.FDとは、縦割り組織の打破—適宜プロジェクトを編成し柔軟に活動する  
組織が細分化すれば、縦割りとなるのは避けられませんが、意識して他との関連を見る、又そういう行動を許容する意識改革が必要です。適宜、テーマごとに既存組織を超えてプロジェクトを編成する柔軟な運営も必要でしょう。これには管理職の姿勢も大事です。

- 4.FDとは、教職員間の垣根を崩す—情報共有によるコラボレーションの達成  
学生から見れば、教職員はいずれも尊敬すべき先輩ですので、対応には教職員間の整合性が大事です。授業に限らず、就職相談など本学の面倒見の良さ、学部事務室などのワンストップサービスの良い点をさらに教職員間連携で伸ばして行きたいものです。

- 5.FDとは、延長線上からの脱却—自己改革により生きがいの共感と共有  
従来の見方、方法へのこだわりは捨てましょう。学生は毎年フレッシュな感覚で入学し、教職員も適材適所で異動しますが、常に過去(の栄光)にとらわれず、延長線上からものを見るのをやめ、自己改革により成長への生きがいを共感し共有して行きたいものです。



## 授業アンケート集計結果を 目の前にして

教育センター長  
(工学部応用化学科 教授)

野村 良紀

継続的に「授業アンケート」を実施するようになって丸10年が経過し、当たり前の行事として定着したように思います。授業アンケート開始当初は、全科目で実施していたわけではありませんでした。その後、全科目での実施に拡大し、さらに2011年度からはC-Learningシステムを導入したことで、授業が終われば集計結果に触れることができます。

このように履修者からの反応をすぐさま目にすることができる、それは、授業担当者—履修者間の意思疎通を図る有力な手段が手に入ったことを意味します。現行の「授業アンケート」の中では、問6から問11が個々の授業に対する履修者からの評価になります。これらに関する集計結果を読み解き、工夫を重ねることですべての履修者から高い評価を受けることができるようになるでしょう。いずれにしても「授業アンケート」実施に多大なエネルギーを割いていることは確かであり、その結果を活用し形骸化しないよう努めることが必要です。

筆者は、毎週の授業でミニツッパーパーを利用して、授業の進捗が思い通りであった週には、想定したような反応が履修者から返ってきますし、逆の場合には、かなり辛口な意見も飛び出してくることは言うまでもありません。「授業ア

ンケート」の集計結果にも同じようなことが当てはまると思います。したがって、アンケート実施日の授業を振り返り、各問のスコアが思ったとおりでない場合、原因となった場面をいろいろと思い返しなが、次回では同じ轍を踏まないよう留意する必要があります。ただし、毎週アンケートを実施しているわけではありませんので、全15回を俯瞰することは難しいかも知れません。

例えば問8「この授業の教員の声や発音は明瞭で、聞き取りやすかったですか」に対するスコアが低い場合、発話する際に黒板ではなく履修者の方を向くだけでずいぶん変わってくると思います。また、問9「この授業で黒板やスクリーンの図や文字は見やすかったですか」が低い場合、文字自体が小さくて見にくいのか、文字と図などが重なり区別しにくいのか、あるいはそれ以外なのかを推し量る必要があります。これらに関して、履修者からの評価がどうあれ意識しておくべき説として「デールの経験の円錐」を挙げたいと思います。読む、聞く、あるいは見るという普通の授業方法は、最も効率の低い学びの方法であるという指摘です。これに比べて討論に参加する、実際に体験する、などが効率的とされています。そういう意味で、これらの要素を含む授業の組み立てが必要になってくるでしょう。

# 授業アンケート新システム「C-Learning」の活用事例を紹介します

知的財産学部 知的財産学科 講師 高田 恭子



講義の進め方については試行錯誤の繰り返しです。その中で就任当初から実施していたのがコミュニケーションペーパーです。毎回の講義で質問や意見を自由に記述できる紙を配布し、その提出を出席として集計してきました。これには、教員が気づかない「難しいところ」や学生の間違った理解を発見するのに役立つだけでなく、学生の質問を講義で取り扱うことによって学生の関心を引き出せるなど利点が多くあります。しかし、担当するほとんどが専門基礎科目で受講者が多いため、きめ細かな集計ができません。また、講義ごとの質問や意見の確認が大きな負担となっていました。そのようなところC-Learningシステムが導入され自由に設問を設定できると知り、さっそくコミュニケーションペーパーをこのシステムへと移行しました。このシステムは、集計を自動的にしてくれますし、何よりも質問や意見をこちらで書き写す必要がなく本当に便利です。講義で択一問題や記述問題を出題する等、その用途は広く、提出状況を学生毎に一覧で確認することもできます。

現在、講義科目を対象に、毎回の講義終了時にアクセスさせ、その講義の理解度を3段階に示したアンケートと自由記述による質問・意見を提出してもらい、それを出席とみなしています。理解度に関するアンケートは、講義内容の難易度を考慮するのに重宝しています。そして、「全く理解できない」と続けて回答する学生については、解決に向けて個別に相談をするようにしています。興味深いことに、A評価を取得した学生のほとんどが理解度2段階目の「難しくても十分に理解できていないが頑張って講義を受けた」とする者で、毎回の講義で「よく理解できた」とする学生にA評価の取得者が少なかった



のです。学生の自己評価と実際の理解度が異なることの発見でした。このような確認ができるのも、データをcsv形式で取り出せるなど、作業負担少なく情報を整理することができるからです。

このシステムの難点は、携帯電話によるネットアクセスを制限されている学生や、通信料金を気にしてシステムの利用を嫌がる学生がいることです。携帯電話からアクセスできない学生には、その日中に学内のパソコンから提出するように指示しており、毎回5名ほどいます。

C-Learningシステムは、人数の多い講義科目であってもインタラクティブな講義を可能にする強力なツールだと思います。このシステムをさらに活用して双方向講義の実現に役立てたいと考えています。

## 2011年度後期に実施した授業アンケートの概要と集計結果を報告します

### 【実施科目数等】

区分	第1回目(中間) : 2011年11月上旬~2011年11月下旬 (授業7・8回目)				第2回目 : 2011年12月中旬~2012年1月中旬 (授業13・14回目)			
	科目数	履修者数	回答者数	回答率	科目数	履修者数	回答者数	回答率
学部	1,329	69,125	32,160	46.5%	1,328	69,125	28,337	41.0%
大学院	129	1,350	511	37.9%	128	1,330	557	41.9%
総計	1,458	70,475	32,671	46.4%	1,456	70,455	28,894	41.0%

### 【設問項目】

設問	第1回目(中間)設問内容
問1	これまでの授業において良かった点を記入してください
問2	今後の授業において改善してほしい点を記入してください

【第2回目回答項目】 Aパターン 5 : 100% 4 : 80%~100%未満 3 : 60%~80%未満  
2 : 40%~60%未満 1 : 40%未満  
Bパターン 5 : 大変そう思う 4 : そう思う 3 : どちらともいえない  
2 : そう思わない 1 : まったくそう思わない  
Cパターン 5 : 大変よかったです 4 : よかったです 3 : 時々よかったです  
2 : あまりしなかった 1 : まったくしなかった

設問	回答項目	第2回目設問内容
問1	B	この授業の進め方や到達目標について説明がありましたか
問2	A	この授業にどの程度出席しましたか
問3	B	この授業に意欲的に取り組みましたか
問4	C	この授業の復習をしましたか
問5	B	この授業の到達目標を達成できましたか
問6	B	この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか
問7	B	この授業は学生の理解度を配慮しながら進められましたか
問8	B	この授業の教員の声や発音は明瞭で、聞き取りやすかったですか
問9	B	この授業で黒板やスクリーンの図や文字は見やすかったですか
問10	B	この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか
問11	B	総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか

### 【第2回目アンケート集計結果】 ※大学院および工学部(夜間)を除く

学部	学科等	科目数	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11
工学部(昼間)	共通科目	317	4.11	4.56	3.94	3.01	3.70	4.00	3.85	4.14	3.95	4.08	3.99
	都市デザイン工学科	40	3.86	4.52	3.92	3.21	3.60	3.85	3.46	3.64	3.53	3.74	3.73
	空間デザイン学科	43	4.05	4.46	3.93	2.90	3.50	3.88	3.63	3.89	3.58	3.94	4.00
	建築学科	52	4.09	4.50	3.93	3.19	3.61	3.99	3.68	3.98	3.69	4.11	4.05
	機械工学科	110	4.15	4.63	4.13	3.30	3.82	4.01	3.86	4.09	3.95	3.98	4.07
	ロボット工学科	25	4.08	4.77	3.90	3.15	3.53	3.89	3.56	3.90	3.71	3.92	3.99
	電気電子システム工学科	46	4.21	4.61	4.08	3.26	3.71	4.12	3.88	4.12	3.90	4.11	4.11
	電子情報通信工学科	65	4.17	4.67	4.05	3.34	3.79	4.12	3.81	4.08	3.90	4.09	4.08
	応用化学科	47	4.25	4.64	4.02	3.20	3.68	4.08	3.83	4.08	3.91	4.13	4.10
	環境工学科	35	4.06	4.61	3.95	3.28	3.72	4.01	3.77	4.01	3.81	4.02	3.96
	生命工学科	20	3.94	4.73	3.89	3.02	3.59	3.90	3.53	3.80	3.72	3.78	3.88
	技術マネジメント学科	31	4.16	4.25	4.11	3.60	3.97	4.09	4.02	4.19	4.03	4.15	4.10
	生体医工学科	38	4.28	4.45	3.97	3.17	3.76	4.13	3.79	4.16	3.84	4.14	4.05
	情報科学部	共通科目	99	4.03	4.48	3.87	2.90	3.73	3.92	3.86	4.08	3.87	4.05
コンピュータ科学科		52	3.97	4.46	3.82	3.08	3.39	3.87	3.55	3.90	3.75	3.84	3.78
情報システム学科		55	3.96	4.44	3.86	3.17	3.53	3.91	3.66	3.95	3.79	3.90	3.88
情報メディア学科		52	3.96	4.46	3.87	3.16	3.54	3.89	3.60	3.82	3.63	3.92	3.85
知的財産学部	情報ネットワーク学科	48	4.10	4.42	3.94	3.25	3.61	4.03	3.74	3.98	3.91	4.00	3.95
	基礎教育科目	35	4.07	4.27	4.01	3.27	3.69	3.98	3.80	4.03	3.94	3.93	3.93
	知的財産学科	87	4.09	4.22	3.90	3.22	3.68	3.99	3.78	3.95	3.80	4.00	3.95
	教職科目	31	4.31	4.64	4.17	3.05	3.83	4.15	4.14	4.40	4.28	4.33	4.31
	平均(合計)	1,328	4.09	4.53	3.96	3.14	3.67	3.99	3.78	4.03	3.86	4.02	3.99

※すべての授業アンケートはC-Learning[携帯電話を利用したアンケートシステム]により実施し、リアルタイムで授業担当者にアンケート結果をフィードバックしました。

## 教育センターを紹介します ～FDの観点から接続教育はとても重要です～

教育センターで行っている学習支援の一つである「個別学習相談」の内容と担当の先生方を紹介します。教職員の皆様にもっと知っていただき、学生の利用奨励をお願いします。

### 「個別学習相談」とは

大学で正課授業を学修するにあたって「高校で習っていない分野がある」とか「授業についていけない」など、学生個々の不安を解消するため、所定の時間に教育センターの先生が待機し、個別の質問に答えます。利用方法は「質問内容をまとめて、教育センターに来るだけ」でOKです。

教育センターの先生は高等学校で教鞭をとっていた方々が中心ですので、学生に対して親身になって(時には厳しく)熱心に指導します。専門科目等、教育センターで答えられない内容の質問に来た場合は、授業担当者に連絡して引き継ぐなど、丁寧に対応します。

## 大宮キャンパスの主な先生

### 基礎学力の向上に向けて

特任教授

**松田 秀樹**

担当教科/数学 担当正課科目/「基礎数学・同演習」



大学入学者の学力低下が指摘され、多くの大学において様々な形のリメディアル教育が進められています。本学におけるリメディアル教育の取組みは、私をはじめ高校教育経験者が教務部に採用された2004年度からの基礎学力支援活動に始まったのではないのでしょうか。

学力低下の原因として、18歳人口の減少や入試の多様化に加えて、ゆとり教育の推進による数学・理科の学習時間・教育内容の削減などが指摘されています。ここで留意しておかなければならないことの一つは、これらの原因はいずれも学生自身に起因するものではないこと、二つには、種々の調査結果をみると学生間の学力幅が大きくなっていることです。これらのことから、学生に専門教育をする上で必要な基礎学力を身に付けさせることは大学の務めであり、学生へのきめ細かい指導が求められています。

2008年度からは教育センターが発足し、基礎学力支援活動として「基礎力向上講座」、「個別学習相談」の二本柱で取り組んでいます。リメディアル教育は重要な課題ですので、FD活動のひとつとして、教育センターの活動についても、ぜひ、専門学科、一般教育科の先生方にかかわっていただきたいと思います。

学生から、「先生、無事に就職が決まりました。こんな会社です。ありがとうございます。」と報告を受けたときは、少しは役に立つことができているかな、とうれしく思いました。このような学生を一人でも多く送り出したい、と思っています。

特任教授

**八尾 隆**

担当教科/数学  
担当正課科目/  
「基礎数学・同演習」



特任教授

**仲谷 隆次**

担当教科/数学  
担当正課科目/  
「力学a」  
「力学b」



特任教授

**田中 東**

担当教科/  
数学&物理  
担当正課科目/  
「基礎数学・同演習」  
「力学a」「力学b」



准教授

**吉田 福蔵**

担当教科/  
数学&物理  
担当正課科目/  
「基礎数学・同演習」  
「力学a」「力学b」



(大宮キャンパス、枚方キャンパスを兼務)

## 枚方キャンパスの主な先生

### 情報科学部における

### 2011年度「教育センター」の取り組み

教育センター 副センター長  
(情報科学部 コンピュータ科学科 教授)

**藤井 研一**

教育センターの役割の最も重要なものは、学生の学習に適した環境を整え、学習意欲を向上させることにあると考えています。

情報科学部でも、学生の基礎力や学習意欲の向上のために、教育センターとして様々な取り組みが行われてきましたが、教育センターを利用する学生数は当初期待した程ではなく、新たな取り組みが必要と考えられていました。

改めて大学での学習について考えると、学習者が授業での学習内容を理解するためには、不明な点を出来るだけ早いうちに明らかにすべく、復習をすることと質問をすることが重要となります。このような観点から、復習出来る機会の提供と質問をしやすい環境の整備が必須と思われたため、今年度情報科学部の教育センターとして新たに次の様な取り組みを行いました。

復習の強化の意味で、夏休み期間中に基礎を復習する短期集中パワーアップ講座に数学の2講座、物理の1講座を開講しました。教育センターの森部、田中、両先生の的確な説明もあり、熱心な学生の参加を得ることができました。

またユニークな試みとしては、授業では独立に行われている数学と物理の関係を明らかにする講義が、数学担当の情報システム学科 真貝先生により「数学・物理ハイレベル講座」として行われました。この正課の授業を越えた独自の講義の試みで



特任教授

**森部 幸人**

担当教科/数学  
担当正課科目/  
「基礎数学・同演習」



特任教授

**田中 東**

担当教科/物理&数学  
担当正課科目/「基礎数学・同演習」  
「力学a」「力学b」

(大宮キャンパス、枚方キャンパスを兼務)

は、コンピュータによる物理現象のシミュレーション方法にも触れられていたため、情報系の学生には非常に有益だと思われました。残念ながら、事前の周知が十分でなかったため参加者の人数は限られましたが、アンケートでは非常に高い評価を得ました。今後ともこのような授業の復習や発展を行う集中講義を行うことを試みたいと考えています。

また、より広く学生の疑問に答えるための取り組みも新たに行いました。これまで学生に対して、オフィスアワーを設けて質問を受け付けてきましたが、「教育センターや教員のオフィスの敷居が高くて質問に行きにくい」という声があがっていました。実際、これまで質問のために教育センター等を訪れる学生は非常に少数でした。

そこで、教育センターや教員のオフィスで教員が待機し質問に答えるのではなく、学生が質問しやすい場所に教員が出て行って質問を受け付けるコーナーを設けました。設置場所としては、学生が必ず通る道筋である建物の入り口横を選び、昼休みの時間帯に質問を受け付ける様にしました。午前中の授業を終えて食堂に向かう学生の目につく場所のため、質問コーナーの存在自体が認知されました。設置した最初の日から質問に訪れる学生が現れ、今年度前期でおよそ80名、後期で70名の学生が質問に訪れました(質問コーナー設置時間数:前期1時間×15週、後期2時間×15週)。当初、数学と物理の質問を受け付けるコーナーとして始めましたが、目を追うに従い、数理系の専門科目を含む非常に多くの内容に関する質問が浴びせられる様になりました。前期中盤からは事務系職員も奨学金の質問や進路相談を受け付ける様になり、後期には英語担当の教員も机を並べて質問に答える様になりました。始めたばかりのため、時間の問題など改善すべき点が多々あることも分かりましたが、学生の現状も分析してさらに効果的なコーナーとして発展させていきたいと考えています。

情報科学部の学生は概しておとなしく、悪く言えば積極性に欠けるらしいが有ります。このような学生の傾向などを的確に分析して、上記以外の試みも検討していく予定です。これらの取り組みにより、学生が授業内容をより深く理解する助けとして教育センターを活用してくれることを望んでいます。

備考:情報科学部のオフィスアワーは専門科目を除く英語・数学・物理の正課科目に対応しており、教育センター支援内容に含めて行っています

# FDフォーラムを開催しました！

第2回(通算14回)1月20日開催

テーマ「独創的発想訓練～岡山大学におけるPBL(Project-Based Learning)の取組み～」

講師 塚本 真也 氏(岡山大学 工学部機械システム系学科 教授)

岡山大学教授の塚本真也先生をお迎えして講演いただき、140名を超える教職員が参加しました。本講演では、PBL教育の専門家としての立場から多くの事例など幅広くお話していただき、質疑応答では多くの質問がありました。



### 参加者アンケートより抜粋

- ・PBL導入を検討する上で非常に参考になった
- ・具体的な事例を聞くことができPBL導入のハードルが低くなった
- ・知識力=創造力ではない、ということも学生にも理解させて将来に希望を与えることができそう
- ・専門分野に関わらず発想力の向上につながる柔軟なテーマ設定が重要であることを実感した
- ・PBL導入の手がかりを得ることができたという意味で有意義であり「ほめる」というキーワードを実践したい

## FDフォーラムに参加して

工学部 機械工学科 教授 上田 整



工学部機械工学科では、5年前からJABEE申請の一環としてデザイン教育科目である「エンジニアリング・プラクティス-II(通称エンブラ)」を新設しており、今回の講演はエンブラに関する問題点の発見および今後の改善にとって最適の内容でした。「発想力」といった非常に抽象的な力を高めるための方法として、①適切なOpen-Ended課題を呈示し、考えるきっかけにすること、②創造力の訓練には専門性の排除が不可欠であること、③現象のメカニズムを説明するメカニカル発想法、などについて論理的に説明頂き、エンブラの教育内容・方針がより明らかになりました。また「学生を評価する教員間格差があるのも事実であり、それはある程度仕方の無い事である。これは企業でのプロジェクトを疑似体験させるといった観点からすると当然のことである。」とお話は、教員がある特定のグループのみを担当するエンブラの成績評価に関する問題点を解決する一つのヒントとなると思われました。

## 授業改善の取り組み事例を紹介します

工学部 応用化学科 准教授 村岡 雅弘



工学部応用化学科1年次には、前後期に必修科目として実験「応用化学実験基礎-I」と演習「基礎化学演習I-II」が開講されています。実験では毎週2時限、演習では毎週1時限、6名の担当教員が普通の講義よりも学生に近接した形式で指導しているため、学生諸君の授業に対する満足度や内容の理解度は比較的高いのですが、その一方で、具体的に授業のよかった点や改善点、悪かった点など、自由記述意見が多く寄せられるのも事実です。

以上の観点から実験・演習で学生諸君が授業アンケートに回答した内容に対してフィードバックする手法として、右記のプリントにまとめて配付する取り組みを実施しています。

プリントでは、授業アンケートの各設問に対する集計結果を今年度と前年度の平均値として比較し、それらに対する担当者のコメントを記述しています。コメントには、設問に対する集計結果をどのように具現化するかをわかりやすく記述しています。

また、「授業の良かった点もしくは改善すべき点」や「授業を良くするための意見」では、寄せられた学生からの意見と担当者からのコメントを対比させ分かりやすく表でまとめています。非常に道理にかなっているものから苦情など多種にわたる意見に、担当者として授業に対する考え方やシラバスに記載されている授業のねらい概要も加味して織り交ぜ、納得できる表現でコメントを記述しています。

このようなフィードバックを行うことにより、学生と担当者間に信頼関係を築くことができ、学生諸君はアンケートに回答したことを納得できます。このフィードバックは担当者の学生に対する礼儀であるとともに、当たり前行動だと思えます。これを受け取ったすべての学生が目を輝かせて我々のコメントを読み、満足な表情をしていることが、何よりの証拠でしょう！

少なからずフィードバックの満足度は100%であることは間違いではないようです。

2012年度後期第2回授業アンケートに関して 「応用化学実験I」 2012年1月23日

アンケート実施日：2012年1月16日(第14週)、回答者：111名(1月21日10:00現在)

- 設問1 この授業の進め方や到達目標について説明がありましたか  
設問2 この授業にどの程度出席しましたか  
設問3 この授業に意欲的に取り組めましたか  
設問4 この授業の宿習をしましたか  
設問5 この授業の到達目標を達成できましたか  
設問6 この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか  
設問7 この授業は学生の理解度を配慮しながら進められましたか  
設問8 この授業の教員の声や発言は明確で、聞き取りやすかったですか  
設問9 この授業で黒板やスクリーンの図や文字は見やすかったですか  
設問10 この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか  
設問11 総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思えますか  
設問12 この授業のよかった点もしくは改善すべき点は何か。なるべく具体的に記述してください。また、この授業を良くするための意見があれば入力してください

### ◆設問1～11集計結果

設問	2011年度の平均値	前年度の平均値	前年度と比べて
1	4.42	4.43	↑↓
2	4.92	4.38	↑↑
3	4.41	4.38	↑↓
4	3.45	3.75	↓↓
5	4.01	4.09	↓
6	4.33	4.37	↑↓
7	3.95	4.15	↓↓
8	4.14	4.03	↑↓
9	3.97	4.12	↓↓
10	4.34	4.30	↑
11	4.43	4.46	↓

### 【集計結果に対する担当者からのコメント】

小数点以下2桁目までの数字を使って前年度からの傾向を示しましたが、数値アップが4項目、ダウンが7項目となりました。とくに、設問4は0.30ポイント、設問7が0.20ポイントと、それぞれダウン幅が大きくなりました。数値としては設問7の結果について各みな必要があります。「授業満足度」を表現している設問11は、学科平均値4.01よりも0.42ポイント高く、設問3の平均値も合わせて、学生諸君が実験の必要性を認識し意欲的に取り組んだ結果が具現化されたとも言えます。2年次の実験でも、引き続き高いモチベーションを葆ち、さらにスキルアップに努めて下さい。

### ◆設問12への記述内容とそれに対する担当者からのコメント

改善点・意見など	担当者からのコメント
●毎回出される宿習が多くて苦労した。	▲この意見は、基礎化学演習IIのものではないですか？
●片付けの仕方とか器具の洗い方(汚れがとれないとき)などもテキストに載っていたら、実際に聞いて下さい。来年度のテキストへ記載するか検討もついで取りよくできると思う。	▲汚れの種類によって対処法が異なりますので、教員に聞いて下さい。来年度のテキストへ記載するか検討もついで取りよくできると思う。
●部屋が寒い。	△試験前やむをえません。厚着で対処して下さい。
○説明も分かりやすく、実験もスムーズにいったのでよかったです。	△了解しました。
○説明がわかりやすくよかったです	△OK、さらに理解を深めるための論議を盛りなく。

～FD NEWSを教職員の情報共有にお役立てください～

学部・学科・小グループ・個人での取り組みや活動をFD NEWSに投稿してください。授業運営上の悩みを解決した方法などがあれば情報共有していきましょう。

【お問合せ先】

大阪工業大学教務部教務課  
TEL.06-6954-4083  
FAX.06-6954-4049  
kyoumuka@ofc.oit.ac.jp